

V 生物多様性

(1) 動物調査

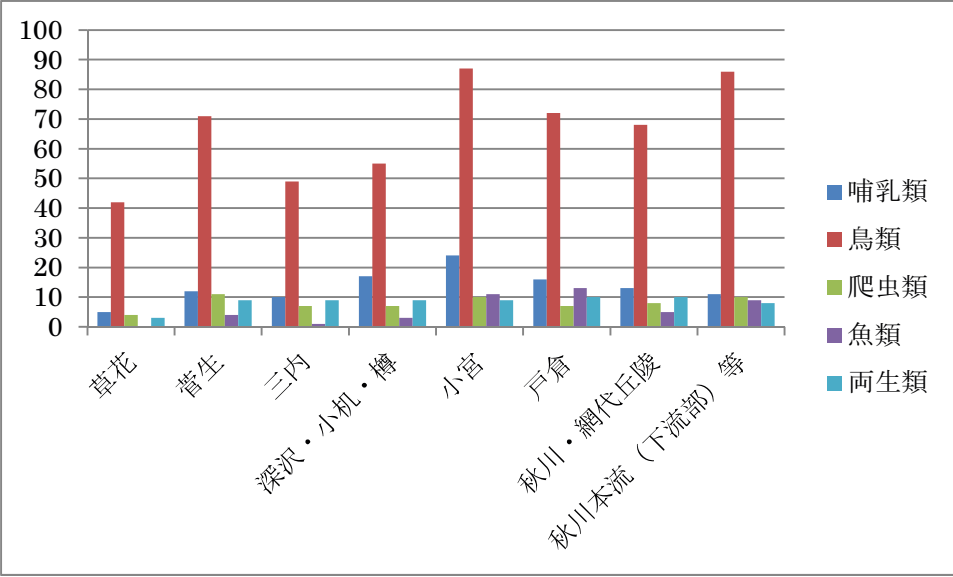
(パプロ)

市内の森林において、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類の分布調査及び生息調査を行いました。また、魚類及び昆虫の一部（トンボ、チョウ、バッタ、甲虫の仲間の一部）についても調査を行いました。確認した動物の生息位置の詳細をGPSで記録し、そのデータを分析した結果、地区別の生物多様性の現状について、大まかな傾向を把握することができました。次の表では、地区別の種数（合計データ）を示します。なお、一般的な動物の確認や記録は平成22年から平成23年までの2年間の間に行い、基礎データとして以下に紹介します。平成23年からは希少種の調査を強化し、平成24年からは重要動物を中心に動物調査を行っています（希少種、絶滅危惧種の確認や「希少種の特別調査」）。

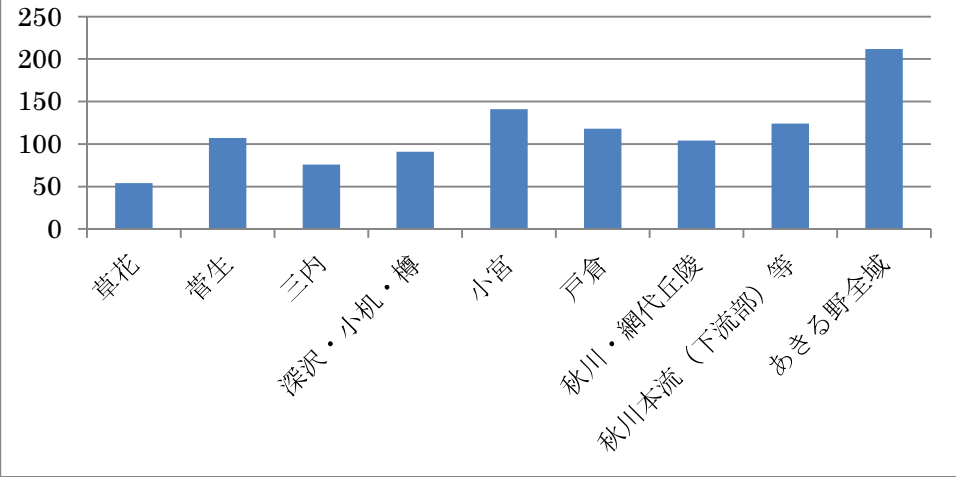
<地区別の動物種数>

地区	哺乳類	鳥類	爬虫類	魚類	両生類	全種類
草花	5	42	4	0	3	54
菅生	12	70	11	4	9	106
三内	10	49	7	1	9	76
深沢・小机	17	54	7	3	9	90
小宮	24	86	10	11	9	140
戸倉	16	71	7	13	9	116
秋川・網代丘陵	13	66	8	5	10	102
秋川本流（下流部）等	11	86	10	9	8	124
あきる野全域	27	132	15	23	15	212

グループ別及び地区別で動物の数



動物全種類



連続で、豊かな森林が存在する小宮地区及び戸倉地区では、多くの種が確認されました。哺乳類及び鳥類は、広葉樹林又は混交林の多い小宮地区の森林で種類が多いのが目立ちますが、戸倉や菅生の各地区の種数も小宮地区の結果と大きく変わりません。また、秋川の河川エリアは、数多くの貴重な鳥類にとって重要な生息環境を与えているようです。一方、コウモリやネズミなどの小型哺乳類については調査不足となっています。

爬虫類は、多様な生息環境や日当たりのよい場所が多く存在する菅生地区において、最も多くの種が確認できましたが、あきる野全域の里山環境では同じ割合で個体数が多く見られました。しかし、エサとなる両生類が捕食する昆虫

や両生類の減少、又は中型哺乳類及び人間の影響により、ヘビなどの個体数は減少していると思われます。

両生類は、草花、深沢、小机、菅生の各地区などの里山で減少傾向にあるようです。種数が多い場所（両生類のホットスポット）は草花以外にほぼ全地区で確認されましたが、個体数及び産卵場所が過去に比べ、限られています。一方、両生類にとって良好な生息環境や水質を保っていると考えられる戸倉や小宮地区の森は、今後の調査においても注目すべき森林であると考えられます。

夏季には、秋川などの河原で発生する不法投棄や河川区域のオーバーユースが自然に影響を与えているようです。また、農業関係や土地利用の変化などにより生態系の汚染や減少が見られました。なお、マニアなどによる密漁もトウキョウサンショウウオなどの希少種において、問題になっています。

魚類については、河川の下流部では調査不足であるため正確なデータがありません。放流活動や外来種などの影響で複雑な状況にあるようですが、比較的、上流部及び各支流では希少種を含んだ多くの種類が確認されています。

全ての分類群を含めて比較すると、小宮地区が最も種の多様性が高い地域でした。また、草花地区は他の地区と比較すると、生物多様性が高いとは言えませんが、地区内の森林面積及び付近の人間活動を考えれば、限られた自然環境の中に多くの種が分布していると言えるかも知れません。

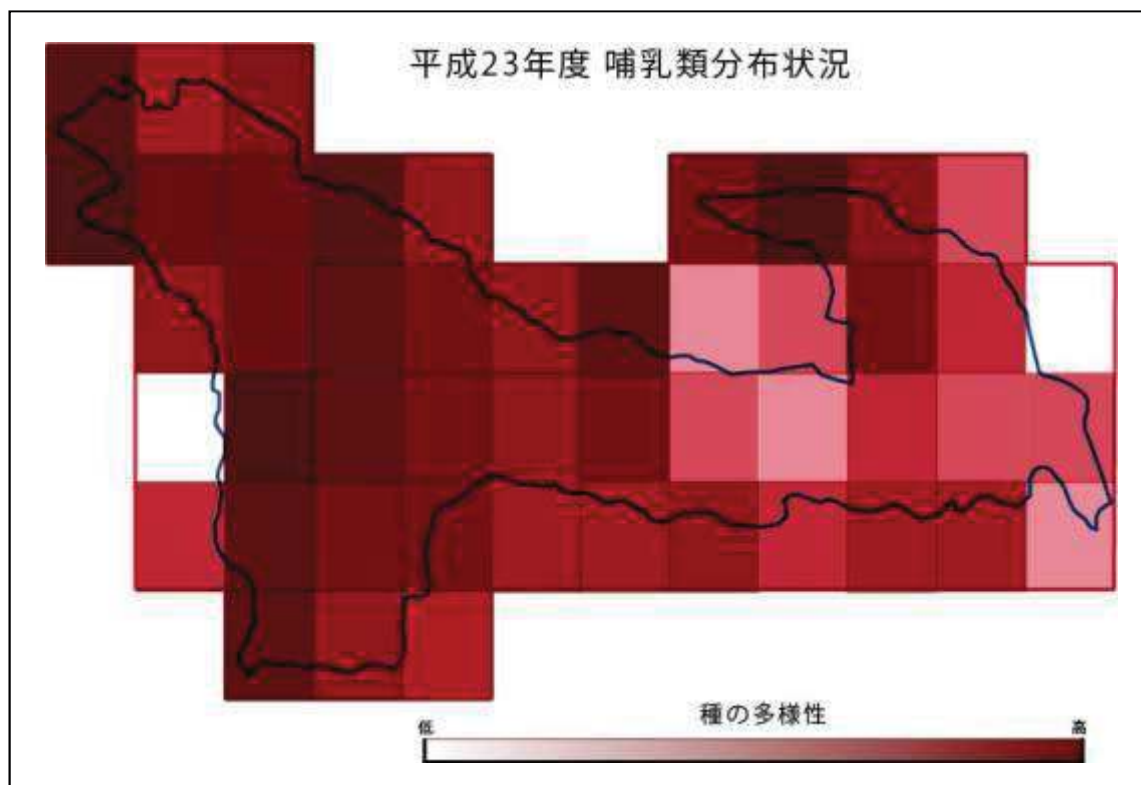
全体的には、丘陵の里山環境の悪化が進行しており、これに対処するための対策が最も重要な課題であると考えられます。具体的な対策として、里山環境の再生のために、ビオトープ作りや谷津田の再生、生態系の保護などの活動を小規模ながら実施しています。今後も同様の活動を拡大していく予定です。

確認された種の市内における大まかな分布状況について、以下に哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類及び魚類の分類群別のメッシュマップで示します。メッシュマップは緯度経度の差が一分当りで作ったものであり、標準地域メッシュ・システムとは一致しません。

(1.1) 哺乳類

哺乳類については、特に多様な自然が存在する森林地帯において多くの種が確認されています。なお、森林性であるニホンジカ、カモシカ、ツキノワグマ、ヤマネなどの希少種は市西部（市の奥山）のみで確認されています。一方、普通に生息する種であるホンドテンやホンドタヌキなどは全地域の森林や農地などで記録されました。また、全体的に哺乳類が好む環境により、特に里山環境及び奥山環境での各種の分布が異なることも目立ちます。

哺乳類の多様性に関しては、本州で生息する大型哺乳類の在来種は全てあきる野市内で確認されています。近年、あきる野市に侵入してきたカモシカの分布は拡大していますが、ツキノワグマと同様に個体数はまだ少ないと見られます。ニホンジカ、カモシカやツキノワグマの分布域は標高などの環境条件に限らずに、森林の連続性などと深く関係しています。また、小型哺乳類に関しては目撃することや痕跡による種類別の確認が難しく、情報不足により各種類の分布状況は大部分が不明です。そのため、結果データにコウモリ科やネズミ科の一部の種類は、含まれていません。但し、リス及びネズミ科の痕跡などが多く確認されています。



＜哺乳類の写真＞



ニホンザル



ニホンイタチ



ホンドモモンガ



ニホンリス



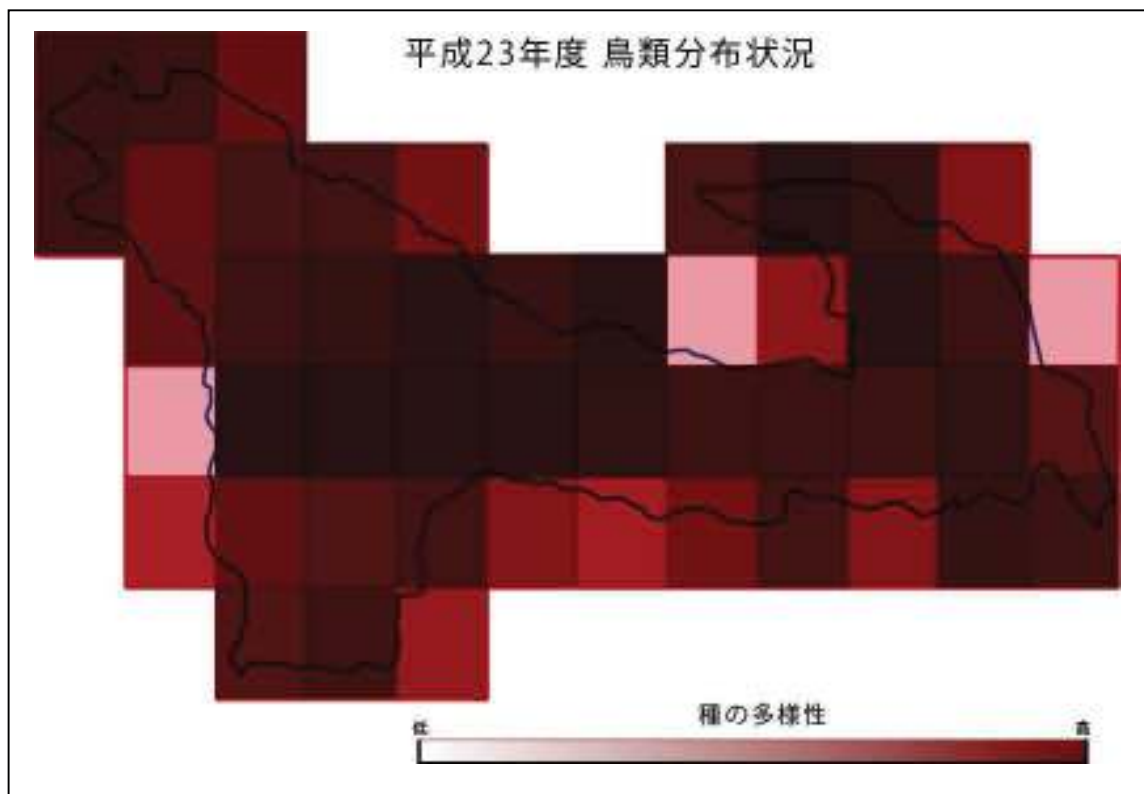
カワネズミ



キクガシラコウモリ

(1.2) 鳥類

鳥類については、広葉樹林、里山又は水辺環境などにおいて、最も多く確認されましたが、地区により季節に合わせた鳥類の移動とともに大きな変化が見られました。特に、渡りの季節は一時的に滞在する種類の数が急に増加します。一方、真夏及び真冬には種数が最も少ないと見られます。関東地方では希少種になっているクマタカ、ハチクマ、ミゾゴイ、サンコウチョウ、コマドリ、アカショウビンなどが分布していることから、市内の多様な自然環境や重要な生態系が各種の鳥類の貴重な繁殖エリアになっていると考えられます。また、奥山、里山や河川環境のコントラストが強く、この三つの大きな自然環境が同地域に存在することはあきる野の自然の最も大きな特徴と言えます。



(備考) スズメ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツバメ、ドバト、キジバト、ハシボソガラスやハシブトガラスの分布データについては、この分布図には反映されていません。

＜鳥類の写真＞



ミサゴ



ニホンキジ



アカゲラ



カワガラス



カヤクグリ



ルリビタキ



ノビタキ



キビタキ



オオルリ



エソビタキ



オオジュリン



マヒワ



ベニマシコ



ウソ



イカル



ミコアイサ (♀)



オシドリ

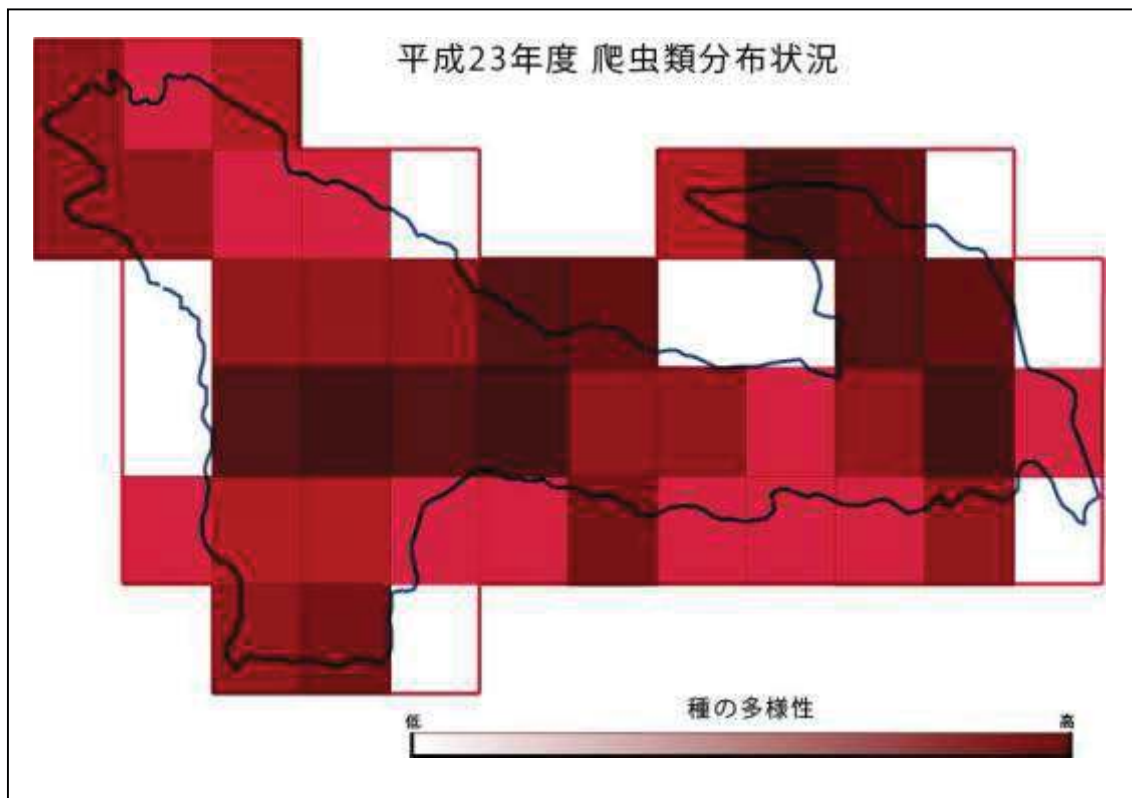


ミコアイサ (♂♀)

(1.3) 爬虫類

爬虫類については、特に針葉樹林又は暗く過密な森林において、ほとんど確認されず、捕食する両生類などの小動物の生息環境と重なって分布していました。しかし、水辺環境以外の場所では個体数は多くないと考えられ、特に人間活動の影響は減少の重大な原因であると認識しています。

関東エリアで見られる爬虫類の全種は市内に生息しており、各種も広い範囲で分布しているため、現在は絶滅の危険性がないと思われますが、個体数や詳細な生息状況などが心配です。



＜爬虫類の写真＞



アオダイショウ



ジムグリ



ヒバカリ



シロマダラ



タカチホヘビ

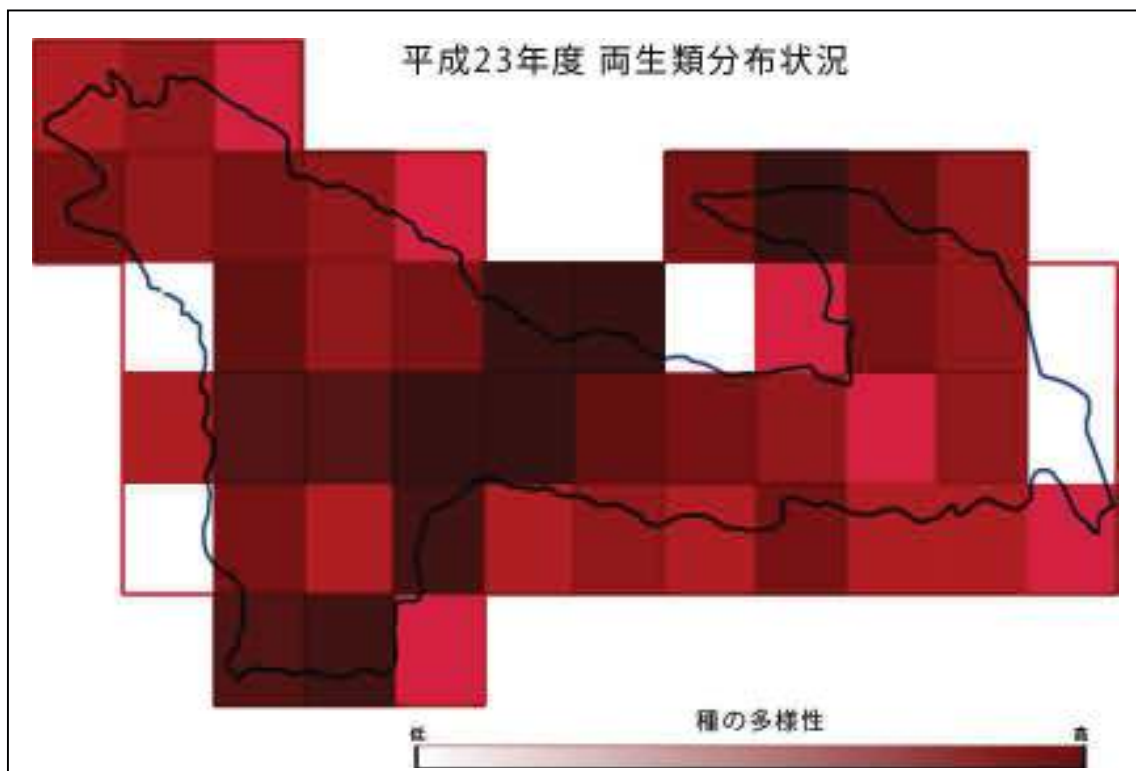


ニホントカゲ

(1.4) 両生類

両生類の分布は多様で良好な自然、または水質などと深く関係しますが、種類により産卵などができる環境が大きく異なります。トウキョウサンショウウオ、ニホンアカガエル、トウキョウダルマガエルなどの止水系の両生類が里山エリアの湿地、池や田んぼなどの環境で確認されています。一方、流水系の両生類であるヒダサンショウウオ、ナガレタゴガエル、カジカガエルなどは奥山や河川区域に生息しています。また、モリアオガエル、ヤマアカガエルやアズマヒキガエルなどは全地域でほぼ一様に生息していることも確認できました。希少種であるトウキョウサンショウウオやトウキョウダルマガエル、アカハライモリ以外では、ヒダサンショウウオ、ニホンアカガエルやツチガエルの個体数が少ないようです。広域に分布している種についても、過去の状況と比較すると、個体数は減少傾向にあると考えられます。かつて、数が多かったヤマアカガエルやアズマヒキガエルは近年で急激な減少が見られています。

両生類は多くの動物の獲物になるため、個体数の変動で、生息する場所の環境バランスが大きく崩れると考えられます。



＜両生類の写真＞



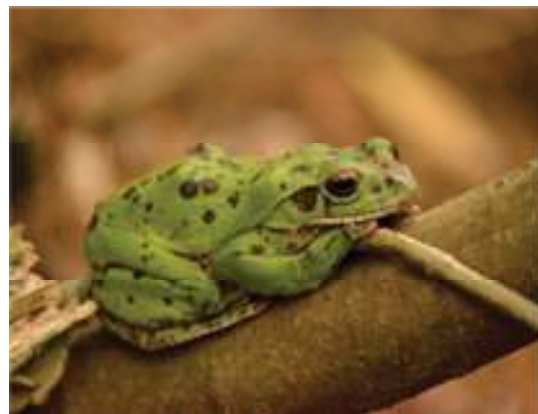
ヒダサンショウウオ



タゴガエル



ナガレタゴガエル



モリアオガエル



シュレーゲルアオガエル



カジカガエル